

虫食い滞英記

ロンドンの街並

リージェント・ストリート——ロンドン最大の公園リージェント・パークを北の起点とし、オクスフォード・サーカス、ピカデリー・サーカスといった買い物街の中心をつらぬいて、さらにはトラファルガー・スクエアからテムズ河へぬけるロンドンの南北の動脈。十二時間飛んだ後のはじめての夜を過ごしたおかげで、ここがロンドンの街並みの原体験になった。

一夜明けて街を一巡りしてみる。オクスフォード・サーカスからピカデリー・サーカスまでの間には、おもちゃ屋のハムレイズ、老舗のデパートメント リバティ、オースチン・リード、ダイアナ妃御用達で有名なローラ・アシュレイなど、観光客ならきゅと声のでそうな面々が顔をそろえる。

中でも目をひいたのがリバティだ。石造りで、三柱式をまねたファサードをもつ建物が多く中であって、この建物だけが木造建築である。ゆるやかに曲がるオークの木組みの茶と白い漆喰の対比が美しい、チンバー・アンド・クラスターというイギリス特有の建築構造で、直線の格子に湾曲したはすかいのはまった木組みの形が、剛・柔とりまぜて壁にリズムを刻んでいる。この形はオーク、という木の素材のシンボリックな性質も手伝って、イギリスの森の象徴である。その木組みの下、窓という窓には、小さな花をいっぱい垂れ下がらせてプランターが並び、森から野へと、われわれの想像を誘う。建物の中に入ってみると、歩けば床がきしむような磨きあげられた木の古さが、ますます飾られている商品をピカピカと、神秘めかして演出していた。

さて、通りを北から眺めると、左右の石造建築がいかにも遠近法という感じで、視線を四方から一点に集める。その集めた先にあるのがオースチン・リードだ。ピカデリー・サーカスへとゆるやかに曲がりながら流れ落ちてゆくその建物は、十九世紀初頭のものだ。石という重厚な素材を扱いながら、何か踊るような軽さと、スケールの大きい優美さが感じられるのもその経てきた時代の故だろうか。だがこの道とこの建物をつくづく眺めると、どうもそれだけではなさそうだ。建物とともに、曲がりながら消失してゆくこの道は、その先に何か古い、とても古いものにつながっているような遥けさを感じさせる。それはこの街の歴史や、さらに歴史以前とのつながりをどこかに宿している。もちろん大ロンドンには、ローマ時代の川べりの町ロンデニウムをその古層に負っているのだから、この道のみせる不思議なつかしきや安心感は、この古層が映し出させてくれるロンデニウムの幻影なのかもしれない。

ピカデリー・サーカスから左へ折れ、世界最大の本屋、フォイルズへむかう。ここは数年前、東京の八重洲ブックセンターが店舗の大規模拡張計画を断念したおかげで、いまでも世界一の売り場面積を誇っているロンドンきっての老舗である。だが実際に足を踏み入れてみると、広いという印象は全くない。かわりに奥が深いのである。建物がつぎはぎだ

らけなのか、philosophy のコーナーひとつに行くにしても、エスカレータで二階へ上がり、フロアをぐるっと裏へまわって語学の棚を過ぎ、さらに階段を数段降りた専用の中二階フロアまでお越しいただく、という塩梅だ。まさに書物の「森」である。おまけに建物が古いせいも、ならんでいる本が古びていて、まるで古本屋にいるような気分になる。気分だけではなく、確かに手にした本はどれも新品には見えない古めかしいものがほとんどだった。ロンドンとはいえ、世の中、売れる本ばかりではないのだ。もっともこの新本を古本にみせてしまうところもロンドンの趣味のひとつなのかもしれない。なにしろ庭を「自然風」に仕立てるために、はじめから廃墟である建築をつくってしまう街なのだから。

このフォイルズのあるチャリング・クロス・ロードとリージェント・ストリートにはさまれたところには、ソーホーがある。ホテルへ戻るために必然的にここを突っ切ることになった。ここは夜の街というイメージしかなかったのだが、渋谷のようにカラスが道ばたのゴミを食いあさる、といった光景はみられない。もっとも、徘徊したのはもう九時を過ぎていたから、今さら明け鳥でもなかりうが、中華料理屋やパブが多い中にも、カフェがケーキなどをならべているところも多く、歌舞伎町のすさんだ光景を予想していた目には新鮮にうつつた。

ホテルに戻ると、もう一度ゆっくりと、街の地図を眺めてみる。街を鳥の翼に見たてると、右翼にはバッキンガム宮殿やビッグ・ベン、左翼にはロンドン塔やその手前のシティ、そしてちょうど頭の先を右から左へはしるのがテムズ河である。今歩いてきたところはさしずめ左の懐のあたりだろうか。午後からは右翼にあるデパート、ハロッズに目標を定める。午前同様リージェント・ストリートをピカデリーまで下ると、今度は右へ曲がる。三越・そごうなどどこかで見たことのあるロゴ・マークを横目に見ながら坂を下ると、グリーン・パークとハイド・パークの間をぬうようにしてハロッズのあるナイツブリッジに出るはずだ。目指す公園にさしかかった頃に、しとしとと雨が降り出した。キリッと寒い空気を、細かい雨が溶かすように音もなく覆っている。芝生のむこうで何かが動いたと思ったら、長い尾をまるめて走り回っているのは、リスだった。池沿いに歩くとあちらでもこちらでもリスが跳ね回っている。人に慣れていて、ベンチでくつろぐ人の手から直接エサをもらっては頬をふくらませている。犬を連れて散歩する人が多く、犬もリスも、池のそばでくつろいでいるカモもカラスも、みな一様に雨の中で目を細めて、だまっている。池がいつまでたっても終わらないので、不思議に思い地図を確かめると、先ほど曲がって下りてきた坂はナイツブリッジへ向かうそれではなく、まっすぐにセント・ジェームズ・パークに向かう道であった。このセント・ジェームズ・パークはロンドンで一番古い「パーク」、すなわち貴族の猟場である。もともと野中の都市ロンドンと、それを囲む原野であったこのパークと市街の関係は、膨張する都市生活に対してこの原野の一角が貴族によって猟のために保護されたことから地と図の関係を逆転し、元の原野は今、こうして囲われた土地として残されている。注意深く見れば、この土地は周囲の街より一步低い位置にあり、テムズの氾濫原の中の低地であったことがうかがわれる。建物を森に見立てる感性も、ここにすれば素直に納得できる。ロンドンにはこれらいくつかのパークや、そして街中に散

見されるスクエアも含めて、街を造った者の、背後の野に対する畏怖の視線が処々に残されている。そしてそれはどこかでみなテムズに、そしてそのむこうの海へとつながっている。

雨がよいよよ強くなったので、公園のはずれからタクシーをひろった。ナイツブリッジは人波であふれ、ホテルに帰りついたのは、もう暮れ方であった。

一週間後、今度は川べりのテンプルというところに宿をとった。ここから近いストランドやコベント・ガーデンなどの一帯は、リージェント・ストリート周辺の観光の中心よりもさらに古く、一層深い影をおとす街だ。なぜかこの辺りの街にペストや、殺人事件や、貧民窟といったかがやかしい大ロンドンの裏を思い起こさせるものがあるのは、やはりここが橋を中心とする街だからか。橋が彼岸と此岸、異界との接点であることは、世の東西、今昔を問わない。テムズの側から一望のもとに眺められるロンドンは、霧のむこうにかすんで、何か遠い世界に浮かぶもののように見えた。

キュー・ガーデン

ロンドンがひとつの「世界」であった証しが、大英博物館とならんでもう一つある。キュー・ガーデンがそれだ。ここは世界一の植物園であり、世界の庭の博物館でもある。

イギリス人に趣味は何かと訪ねると、「園芸」という答えが一番に返ってくるそうだが、この返答はある種のステータスの表明を含んでいるという。それもそのはず、十八～十九世紀、資源としての有用植物を求めて世界を駆けまわったプラント・ハンターたちは現地から茶やゴムといった植物を持ち帰り、そのことが後に帝国の植民地支配を固める基礎となっているからだ。園芸は趣味の問題であるより前に、国策の問題でもあったのだ。そして彼らプラント・ハンターたちの活動の拠点となったのが、ここキューなのである。

ロンドンの中心から地下鉄で三十分、キュー・ガーデンの駅前は実にのどかでこじんまりとした街だ。すぐ次が高級住宅地で名高いリッチモンドだが、どこにもそんな影はない。二、三軒並んだ花屋やドラッグ・ストアを過ぎると、キュー・ガーデンまではひっそりとした住宅の中の小径だ。沿道の景観整備のために各戸に壁をつくることを禁じたセット・バック法のためか、屋並みはみな低い垣根のむこうにピアノや暖炉のある居間での生活をのぞかせている。ここで山高帽にステッキの初老の紳士と、深い皺の間に才色兼備の昔をしのばせている婦人が連れ立って散歩でもしていれば相当なものだが、平日の昼間でもあり、人という人は一人も見当たらなかった。

キューに入るにはビクトリアン・ゲートが近い。とても半日くらいで一周できる広さではないので、主だった建物の周辺を中心にまわることにする。ビクトリアン・ゲートから正門の方向にむかって歩き、やがて視界が開けると、先ず目をひくのは、巨大なパーム・ハウスである。この温室は、ビクトリア時代の一八五一年に、ロンドン大博覧会の会場となったあの水晶宮と同じ構造をもつ、建物としてだけ見ても充分鑑賞に値する美しい建物である。何本もの白い鉄骨が地面から立ち上がり、二十メートルを越える高さで二段に組みあって、その間に無数のガラスを陽にかがやかせている。中へ入ってみると、暑い。下

から沸き立つような暑さだ。それに湿気もすごい。この中に並ぶ植物たちのひとつひとつの大きさは、葉も花も、どこをとってもそれまで外で目にしてきた小さな花を無数につけた草花たちとは別世界のもののように思えた。熱帯を旅したことのない私にとって、これははじめての熱帯の体験だった。北緯五十度の熱帯。十月、吐く息も白く見え始めた初冬のイギリスで、はるか南方から切り取って連れてこられた熱帯の空気は、やはり往時の帝国の業を偉業と感じさせずにはおかない。

ところでキューにはもうひとつ、大きな温室がある。テンペレート・ハウスと呼ばれるその建物はパーム・ハウスよりももうひとまわり大きい三層構造になっている。中央には一際高いヤシの木が一本そびえたっているが、解説書によると、和名をチリ ワイン ヤシといい、「キュー・ガーデンの中でも最も印象的なものの一つで、この標本は一八四六年にチリで収集された種子から育てられた。現在では十七メートルを越す巨木となり、テンペレート・ハウスの屋根を突き破るのではないかと危ぶまれている。」そうだ。この温室は原産地ごとに植物が植えられており、日本の植物としてはススキなどが植えられていたが、やはり目をひくのは熱帯の植物で、建物の中ほどにつけられた回廊にのぼってみると、その色彩の見事さ、巨大さがいかにも珍奇さにあこがそうな収集家の嗜好を表しているように見えた。

そういえば、昼食をとったレストランの建物はオレンジリーと呼ばれていたが、この名はもとは温室の意を表していた。近代園芸の草創期、柑橘類の植物は南の国の象徴であり、これを冬越しさせることは貴族たちの庭のステータス上の大きな課題だった。したがって温室とはオレンジのための部屋、としてスタートしたのである。その後、部屋の中に入るべき植物が次第に増え、ヤシ、シダその他の温帯・熱帯の植物がブームとなるにつれて、温室の名称もパーム・ハウス、ファーン・ハウス、グリーン・ハウス、さらにウォーディアン・ケース、コンサーヴァトリー、テンペレート・ハウスなどと様々な呼び方で呼ばれるようになった。これらの呼称の変化はまた、プラント・ハンティングがいかにして国家的事業から個人的な趣味として収奪されていったか、という歴史を表してもいるわけだが、キューの温室たちは、なるほどこの歴史の証人ともなっているわけだ。

テンペレート・ハウスを出ると、その奥にはウィリアム・チェンバース設計の中国風のパゴダや日本の東本願寺から移築したという随神門などが点在するが、何しろ広い園内のこと、早くも陽のかたむく時間になってきた。いつとはいえぬが、またくる日もあろうかと、後ろ髪さえひかれながら駅へむかった。

エジンバラへ

その土地土地で人がどんな生活をしているのか、それを眺めるには、眺める視線の高さが問題になる。空から見ると、街全体が見渡せる。が、「下界」は完全に他人の世界になる

だからエジンバラへは、鉄道でむかった。インターシティという日本の新幹線にあたる特急電車にのる。ブリテン島を縦断する鉄道路線は二本あり、東の幹線の始発駅はロンドン市街の北東部にあるキングス・クロスだ。ロンドンには街の中央まで乗り入れてくる「地

上の」鉄道はない。切符も宿もおさえていないが、席が空いてさえいれば、ロンドン市民にとっては観光のオフ・シーズンなので問題はない。席も宿もガラガラだった。

インターシティは快適な列車だ。スピードが速いわりには、揺れが少ない。しかも、もし席を予約しておけば、テーブル付きのボックス・シートが与えられ、本でも読んでくつろいだ気分のまま目的地に着くことができる。車内で携帯電話をかけるような人間もいない。もっともビジネスマンらしい人間は一人も乗りあわせていなかったが。車内販売もないし、飲み物がほしければ、スタンドはすぐ近くの車両にある。

いつの間にか列車がホームを滑りだして、しばらく行くと、初めて見る、しかし不思議なことどこか見慣れた緑の風景が広がる。なだらかな丘の稜線が視線より少し高い位置でゆるやかに上下を繰り返し、そのむこうから小川が流れ出して次第に近づいてきては線路を越え、また反対へと走り去ってゆく。ところどころに羊や牛が草を食み、それらを囲う低い石垣が続く。こんな描写自体がどこかで一度は目にしたことのある常套句ではあるが、仕方がない。目にうつるのはそれと青い空だけなのだから。むしろこの常套句と現実の一致が奇妙な違和感を与える、という感覚が、ロンドンでも常につきまとっていたことを、そのときにふと思った。それは自身の言葉と、現実に目にうつる風景とどちらを信用すればよいのだろうか、という齟齬の感覚であった。まさに夢の中にいるかのようだ。

丘と、小川と、そして石垣はロンドンを出てエジンバラに着くまで、停車する駅の周辺を除けばえんえんと繰り返された。イギリスには山はないのだろうか？ オークの森は？ 探しても見つからなかった。だが単調さは感じられなかった。絶えず変化していながら、ひとつとして同じ繰り返しのない、それでいてどこかで見たことのある風景。その繰り返しはたとえるなら、波に似ていた。何やら読書も手につかず、あっという間に五時間が過ぎて、エジンバラに着いた。

エジンバラの中央駅、ウェバリー・ステーションは左右の丘に挟まれたごく狭い谷間にある。列車を降りると改札はなく、いきなりホームの横にタクシーがはしりまわっている。高い鉄骨の天井の下をぬけて、左右の丘をむすぶ橋まで上がってくると、左にはエジンバラ城、右には目抜き通りに並ぶデパートが聳え立っている。エジンバラ城は巨大な岩のかたまりの上に立っていて、でもなんだか手が届きそうに見える。距離感がなかなかつかめない。到着した駅は街で一番低いところにあり、そこから城や街を見るとすべては頭上にあるように見える。そこから郊外へはなだらかな下りで、どこまでもつきない裾野が広がっている。エジンバラ城へ上ると、東に海が見渡せるが、それまでなんだか手が届きそうに思えた。

空間から時間へ、軸をとりかえてみても、この距離感のなさは変わらない。エジンバラ城の手前にあるセント・ジャイルズ大聖堂は、現役でありながら、十四～十五世紀の建築。しかも日本の寺院と違い、そこへ到るアプローチというものが無い。街中に十四世紀がむき出しなのだ。すすけた石の壁の間を、礼拝を終えた人々があたりまえの顔で出入りしていた。

宿は落ち着いたかんじのB&B（ベッド・アンド・ブレイクファースト）だった。特に

裏庭を見渡すと、長屋を構成する各戸に裏庭が切り分けられていて、他の長屋がいろいろな方向から裏庭を張り出している。各々の裏庭はその先で一ヶ所の公共のスペースに集まってきて広場になりそこが長屋と長屋の間の狭いすき間をぬって表通りへとつながっている。広場は駐車場としても使われており、公共と個人がうまい具合に入り混じっているものだ、と感心させられた。

裏庭はやはり表にかざられた顔とは違う表情を見せる。古ぼけたバケツがころがっていたり、物置きの戸が破れていたりする。だが、ここでもあちらこちらの家々に温室が見かけられ、また庭のつくりも自然風といいながら手入れのよさをうかがわせて園芸の国の一面をより強く見せてくれた。

翌日、少し郊外にあるエジンバラ動物園に行ってみた。街をはなれて谷沿いに海とは逆の方向へむかう、そのなだらかな斜面にあって、対岸には丘とよぶには少し高い、イギリスで初めてみる山が見えた。風が強く、山は白く霞んで、ますます自分の立っている場所の大きさをはかるものさしを狂わせた。

カンブリア

カンブリア地方はイングランドの北西の端、ちょうどスコットランドとの境にある。カンブリアといえば、氷河時代のカンブリア紀の名を思い起こすが、まさにそのカンブリアとはこのことなのだ。なるほど山々は地面から聳えているというよりも上からえぐられたような形をしている。そしてそのえぐり取られた後に水がたまってできた無数の細長い湖が点在することから、ここはまた湖水地方、レイク・ディストリクトとも呼ばれている。

わずか二日のスコットランド滞在、スコットランド紙幣も使い切れずに二、三枚残したままで、またインターシティに乗ってカンブリアの入口、ウィンダミアまでやってきた。ウィンダミア湖畔からバスに乗って北へむかうと、最初に出会う小さな湖がグラスミア湖だ。この湖畔にワーズ・ワースの暮らした家と、彼の墓が残っている。——石組みの小さな家々と、冷涼で稔りは少ないがふところの深い森がそれを囲む。ときおりやってくる驟雨が木の葉をぬらして、地面に積んだ落ち葉も水を含んで光っている。——グラスミアはそんなところだ。氷河時代の地形のうえに、人々が時代を重ねて作り上げた森や川、石垣や家々が、小さく、しかししっかりと居場所をみつけている。

湖畔を歩くと、犬をつれて散歩する人が多い。雨はいつ降るかわからないのでカッパが手放せない。別荘らしき建物はみな少し奥まったところに建っており、ここにくる人はみな隠者の気分を味わえそうだ。見渡せる山々の上の方がすっかり赤い色をしているので、特別な鉱物でもあるのかと思ったら、近づいてみるとなにやらシダの群落らしく、一面に山肌を覆ったその葉が、季節がら枯れてはてて、山肌を赤茶けて見せているのだった。曇った空、湖、森、単色の世界の中に、赤がただひとつの色といえる色だった。だがその赤色も山に溶け込むには、雨さえ降ればよい。雨がすべてをつつみこんで、淡い色彩と奥行きを風景にも人にも与えているのだった。

この街にはレストランらしきものがない。夕食はホテルでとる以外になさそうだ。近く

にあったホテルは、こじんまりとしてはいるが高級そうなホテルで、その名もワーズ・ワース・ホテルという。食事を申し込むと、コースなので、とまず別室に案内され、用意がとともうまでアペタイザーを出してくれる。客には若い者はおらず、みな引退後の初老の人ばかりのようにみえた。

コースが一通り終わると、また別の部屋に案内され、コーヒーが出される。シティ・ホテルと違ってひとつひとつのもてなしはきめ細かい。円高のおかげで金額的には手が届くが、もしここにくる資格というものがあるならば、まず経てきた年月がまだまだ足りないような気がした。

翌日はさらに北上し、レイク・ディストリクトのさらに奥へ向かう。ダーウエント・ウォーターと呼ばれるその湖は、グラスミア湖よりひとまわり大きい。ここのバスは停留所にその停留所の名が記されておらず、当然アナウンスもないので、どこを走っているのか、皆目つかめない。停留所の数と地図を見くらべて確かめようとするが、どうもわからない。しかし心配は無用だった。ダーウエント湖の端の街、ケズィックはレイク・ディストリクトの奥座敷では最も大きな街だ。教会のある広場を中心にしてマーケットがひらかれている。観光客も昨日のグラスミアとは段違いの数だ。見つけたB&Bの女主人はよくしゃべるおばさんで、御当地の発音を手振り身振りで繰り返し繰り返しご講義におよんだため、写真も残っていないにも拘わらず、その顔と、[ケジック]（ケズィック、というふうにズとイを離して発音してはいけない。）の発音だけは未だにはっきりと印象に残っている。

ダーウエント・ウォーターは湖めぐりのボートが運航されているほどの大きさがあり、ここから眺められる山々はグラスミアから眺められるそれよりもかなり広く開かれた谷の景観を見せている。湖のまわりを歩くと、そここの山をこえてゆく登山路が次々に現われ、兩岸に聳える山々へむかって登って行く。はるか上に見える山の稜線にぽつりと一本たっている木が、ふと目をはなしたすきに位置を変えていて驚かされたが、木とみえたのはバックパックを背負った登山者だった。ここからカーライルへとぬければスコットランド「国境」となるイングランドの涯への地に到達できる。もっとも東西を見渡せばまだまだ中小の湖が点在する格好のトレッキング・コースの起点となる。

教会を中心としてたったマーケットはトレッキングの若者や、車でやってきた近郊の観光客でごったがえし、かつての「往還」ともいえるべき賑わいを見せている。静かで小綺麗な、しかし華やかさもみせるこの街でゆっくりと一日を過ごし、まだまだ奥へとかりたてられる心をおさえて、虫食い旅行の悲しさ、最後にレイク・ディストリクトの入口、ウィンダミアへ戻ることにして、翌日バスで帰途についた。